

『枕草子』の庭と前栽

著者	倉田 実
雑誌名	大妻国文
巻	48
ページ	1-17
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006458/

『枕草子』の庭と前栽

倉 田 実

はじめに

王朝貴族女性と庭とのかかわりを、これまでに『伊勢集』⁽¹⁾と『蜻蛉日記』⁽²⁾において検討してみた。今回は、『枕草子』から清少納言と庭や前栽とのかかわりを見て行くことにしたい。『枕草子』には、庭そのものを焦点化した章段はないが、「木の花は」(三五段。本文とも新編日本古典文学全集による。以下同)、「花の木ならぬは」(三八段)、「草は」(六四段)、「草の花は」(六五段)など、庭木以外も含めた種々の植物を扱った類聚的章段がある。また、日記的章段や随想的章段にも、庭や前栽にかかわる記述が散見する。こうした章段から、清少納言と庭とのかかわりとして特徴的な面を指摘することにしたい。したがって、ここでも「大庭」「祭の庭」「法の庭」といった場としての庭には言及しないことをお断りしておく。なお、引用した本文の表記は、一部私に換えた。『枕草子』以外の引用文献の出典名は論末に記した。

一 木守という者

最初に、清少納言独自というよりは、庭園史の史料ともなることから確認したい。すなわち、「木守」という庭にかかわる者の存在が記されていることである。大雪が降った折、「庭にまことの山を作らせはべらむ」ということで雪山を作ることになり、それがいつまで消えないでいるかを賭けることになった、「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」の段である。清少納言は、雪山を踏み荒らさせないように、木守にその見張りを頼んでいた。

① 木守といふ者の、築地のほどに廂さしてゐたるを、縁のもと近く呼びよせて、「この雪の山いみじう守りて、童べなどに踏みちらさせずこぼたせで、よく守りて、十五日まで候へ。その日まであらば、めでたき禄給はせむとす。わたくしにも、いみじきよろこび言はむとす」など語らひて、常に台盤所の人、下衆など、にくまるるを、くだ物や何やといと多く取らせたれば、うち笑みて、「いとやすき事。たしかに守りはべらむ。童べぞのぼりさぶらはむ」と言へば、「それを制して聞かざらむ者をば、申せ」などいひ聞かせて、(八三段)

この木守は、中宮職の築地に小屋がけして住んでいた。木守は、庭番の者となることは諸注一致しているが、必ずしもそれ以上のことは明確でない。普段は、庭番として、樹木や前栽の手入れをしたり、清掃したりしていたと思われるが、そのことまで記されていない。木守の初出は『枕草子』のようであり、他の史料では、次のような用例が見出せる。

② 丑の剋ばかり伊予守明順宅より数千の石を以て右府に投げ入る。右府、明順宅の中を捜検せしむに、木守一人あり。また無人と云々。明順は国に在り。(『小右記』寛弘二年九月一日条)

③ 一条院東町に木守の男、午の時ばかりに死ぬ。件の町の内膳所に候ずるなり。(『御堂関白記』寛弘六年四月六日条)

④ 御寺の木守、泉木津の下人、(『中右記』康和四年七月十一日条)

④ 新造冷泉院に放火あり。諸国の木守等これを撲滅す。〔百鍊抄〕永承五年七月三日条)

⑤ 木幡ニ我が居タリシ所ニハ木守ニ雑色一人ヲナム置タル。〔今昔物語集〕二七の三二)

⑥ は伊予守高階明順宅から、右府藤原顕光邸に数千の石が投げ入れられたという記事である。在国中の明順宅を搜索させてみると、木守が一人だけいたという奇怪な事件であった。一人だけでは数千の石を投げ入れることは無理である。しかし、木守がいたということは示唆的であろう。庭番なら、普段から石を扱っていたはずである。

こうした木守は、各邸宅や寺院などにも配されていた。①は一条院東町の内膳所に、②の御寺は興福寺、③は冷泉院である。この④は、冷泉院新造に際して、庭の整備のために諸国から木守が集められていたことになろう。⑤の木守は泉木津の出身のようで、この地は木津川から南都に木材を搬入する木津であり、木守にふさわしい。

また、⑥の木守に対して、新全集頭注は「庭園の樹木を守る者。庭番。ここでは留守番の意。：留守番として雑色を一入置いてあるの意」としているが、木守はそもそも留守番を兼ねたのであろう。⑦の例がそのことを示している。だから、清少納言は木守に雪山を守らせたことになる。なお、この木守は、先の引用の後に、「この女」として記されているが、能因本には「翁」とあり、このほうが妥当であろう。

庭番として木守が『枕草子』に示されたわけだが、同じような仕事をする翁のことが『蜻蛉日記』に記されていた。

⑧ 南の廂に出でたるに、つまましき人の氣、近くおぼゆれば、やをらかたはら臥して聞けば、蟬の声いとしげうなりたるを、おぼつかなうて、まだ耳を養はぬ翁ありけり。庭掃くとして、箒を持ちて、木の下に立てるほどに、にはかにいちはやう鳴きたれば、驚きて、ふり仰ぎて言ふやう、「よいぞよいぞと言ふなは蟬来にけるは。虫だに時節を知りたるよ」と、ひとりこつに合はせて、「しかしか」と鳴きみちたるに、をかしうもあはれにもありけん心地ぞあぢきなかりける。〔蜻蛉日記〕下巻・天禄三年（九七二）六月・三〇二―三頁

右では、「まだ耳を養はぬ翁」とだけしか記されていないが、この者が道綱母邸の木守ということになろう。庭を掃こ

うとして、箒を持つのである⁽³⁾。

『枕草子』の木守に対しては、「年がら年中、庭を這い廻って雑草を除き、築土塀に差しかけ小屋を作って住んでいる木守というような下賤最下層のもの⁽⁴⁾」というような把握が行われており、この見方を指示する見解もある⁽⁵⁾。しかし、留守番まで担う木守が「下賤最下層のもの」とするのは問題がある。先に記したように庭番で留守番を兼ねるような者であったので、清少納言は木守に雪山を守らせたのである。「下賤最下層のもの」ではなく、⁽⁶⁾にあった雑色の類になると思われる。とにかく、木守という存在が記されたのは貴重であったと言うべきであろう。

二 牛を繋ぐ木

もう一点、庭園史のささやかな史料になると思われる、車宿の前に小さな木を生やして、牛車の牛を繋いだという記述である。

② 六位の藏人などは、思ひかくべき事にもあらず。かうぶり得て、何の権守、大夫などいふ人の、板屋などのせばき家持たりて、また小檜垣などいふものあたらしくして、車宿に車引き立て、前近く、一尺ばかりなる木生して、牛つなぎで、草など飼はするこそ、いとにくけれ。(一七〇段)

六位の藏人が叙爵して五位になった際に、次のようなことをしてはいけないとする段である。五位になると牛車に乗るのを許されることが、この段の背景にある。板屋の狭い家であっても、車宿を作って車を入れ、その前近くに一尺ほどの木を植えて、それに牛を繋ぎ、草などを与えさせるのはまったく憎らしいものだとしている。ここ「前近く」を家の前近くとする説もあるが、車宿の前近くで問題はなからう。そこに背の低い木を植えて牛を繋ぐなどもつてのほかだというのである。これは京内にまま見られた光景なのであろう。清少納言の批判があるものの、庭の植栽が牛繋ぎに利用された

とする珍しい事例になろう。植栽の別途の使い道として興味深い。

なお、絵巻物では、『春日権現験記絵』巻六に中納言平親宗邸の、『法然上人絵伝』巻十二に民部卿藤原範光邸の車宿がそれぞれ描かれている。前者の車宿の前に植栽はないが、後者には、車宿の脇に柳が植えられた絵柄となっている。共に、牛は描かれていない。場合によっては、公卿の家であっても、車宿近くの木に牛を繋ぐことがあったかもしれない。

三 庭に下りる女房たち

それでは、本題に入りたい。その家の主人となる貴族女性は、みずから庭に下り立つことはない。しかし、女房たちは別である。『枕草子』には、前栽の風情を見るために、清少納言たち女房が、庭に下りたことが三例ほど記されている。これも庭園史の史料となるかもしれない。

③ 故殿の御服の頃、六月のつごもりの日、大祓といふ事にて、宮の出でさせたまふべきを、職の御曹司を方あしとて、官の司の朝所に渡らせたまへり。その夜さり、暑くわりなき闇にて、何ともおぼえず、せばくおぼつかなくて明かしつ。

つとめて見れば、屋のさまいとひらに短く、瓦葺にて、唐めき、さまことなり。例のやうに格子などもなく、めぐりて、御簾ばかりをぞかけたる。なかなかめづらしくてをかしければ、女房、庭に下りなどして遊ぶ。前栽に、萱草といふ草を、籬結ひて、いと多く植ゑたりける。花のきはやかにふさなりて咲きたる、むべむべしき所の前栽には、いとよし。時司などは、ただかたはらにて、鼓の音も例のには似ずぞ聞ゆるをゆかしがりて、若き人々二十人ばかりそなたに行きて、階より高き屋にのぼりたるを、これより見あぐれば、ある限り薄鈍の裳、同じ色の単襲、紅の袴どもを着てのぼりたるは、いと天人などこそ言ふまじけれど、空よりおりたるにやとぞ見ゆる。同じ若きなれど、お

しあげたる人はえまじらで、うらやましげに見あげたるも、いとをかし。

左衛門の陣まで行きて、倒れさわぎたるもあめりしを、「かくはせぬ事なり。上達部のつきたまふ椅子などに、女房どものほり、上官などの居る床子どもを、みなうち倒しそこなひたり」など、くすしがる者どもあれど、聞きも入らず。(一五五段)

④ 職の御曹司におはします頃、木立などのはるかにものふり、屋のさまも、高う遠けれど、すすろにをかしうおほゆ。母屋は鬼ありとて、南へへだて出だして、南の廂に御帳立てて、又廂に女房は候ふ。(略)

有明のいみじう霧りわたりたる庭に下りて歩くを聞き召して、御前にも起きさせたまへり。うへなる人々の限りは出でゐ、下りなどして遊ぶに、やうやう明けもてゆく。「左衛門の陣にまかり見む」とて行けば、我も我もと問ひつぎて行くに、殿上人あまた声して、「なにがし一声の秋」と誦して参る音すれば、逃げ入り、物など言ふ。(七四段)

⑤ 野分のまたの日こそ、いみじうあはれにをかしけれ。(略) 十七、八ばかりやあらむ、小さうはあらねど、わざと大人とは見えぬが、生絹の単衣の、いみじうほころび絶え、花もかへりぬれなどしたる、薄色の宿直物を着て、髪、色に、こまごまとうるはしう、末も尾花のやうにて、たけばかりなりければ、衣の裾にかくれて、袴のそばそばより見ゆるに、童べ、若き人々の、根ごめに吹き折られたる、ここかしに取りあつめ起し立てなどするを、うらやましげに押し張りて、簾に添ひたるうしろでもをかし。(二八九段)

いづれも早朝のことである。③④では、女房たちが、その場の珍しさもあって、前栽の風情を眺めるために庭に下り、あたりを探索しようとしている。⑤には庭に下りている「童べ、若き人々」と、それを羨ましそうに眺める十七、八歳の女性のことが記されている。それぞれ具体的に見てみたい。

③は長徳元年(九九五)四月十日に死去した関白道隆の服喪中の六月晦日のこととされるが、三卷本勘物には「長徳元年六月廿八日、中宮、官の朝所に御す」とある。いづれにしても夏の終わりであり、暑苦しく寝て明かした翌朝、改めて

太政官庁の朝所の様子を見まわしている。床が低く瓦葺の建物は唐風に感じられ、格子のないのも珍しく、風情があると見られている。初めての滞在で物珍しいのである。そして、清少納言ともども女房たちは、庭に下りている。庭には籬を結って、萱草が多く植栽され、あざやかな色で咲いていたという。萱草は、『枕草子』ではここだけの用例で、歌語となる「忘れ草」の使用もない。したがって、「むべむべしき所の前栽には、いとよし」とする評価は分かりにくい。定子の滞在する場としては、実によいということになるか。あるいは、忘れ草なので、道隆死去の悲しみが薄れるということかもしれない。言えることは、清少納言の前栽に注ぐまなざしであり、初めて滞在中で、前栽がどうであるかが気になるのである。だから庭に下りるのである。そして、語られていることではないが、定子が眺めていた可能性がある。それは、④から判断されよう。なお、三卷本勸物所引『小石記』によれば、翌七月四日の夜のことになるが、若い女房たちは、朝所の北にある陰陽寮の「時司」の建物（楼）に上り、さらに左衛門の陣（後述）まで出向いたとされている。このことも④とかわわっているように。

④は、通説通り、中宮定子が中宮職の御曹司に遷御した長徳三年六月二十二日以降の間もなくとなろう。③と同じく晩夏の時節である。中宮職の建物は高く親しみにくい、木立が古色蒼然としていて、その味わいが感じられている。清少納言の邸宅の評価軸には、木立の様子があつた。

⑥ 十月ばかりに、木立多かる所の庭は、いとめでたし。（一八八段）

⑦ （二条の宮は）小家などいふもの多かりける所を、今造らせたまへれば、木立など見所ある事もなし。（二六〇段）
⑥は初冬の紅葉の頃になるが、木立の多い庭は、素晴らしいとされている。逆に、⑦は見ごたえある木立のない邸宅には、風情が感じられていない。だから、庭に下りることをしていない。

この一方で、中宮職は古色蒼然とした庭の木立で「をかし」とされるのである。そこで、庭に下りている。まだ早朝なので男たちの視線がないだろうとの判断である。ここには、二年前の③の記憶があつたのかもしれない。中宮職では、

「上なる人々」（宿直していた女房）全員が下り立っており、聞き及んだ定子も起き出して、その様子を眺めようとしている。主人となる定子が見守るなか、女房たちは庭に下りて遊ぶのである。さらに、清少納言の発案とされる、隣接する左衛門府の陣が置かれる建春門まで逍遙しようとしている。^②では、女房たちが、時司や左衛門の陣まで出向いていたとされたが、清少納言は同行していなかった。今回は、清少納言が率先して逍遙を提案しているのである。これは、定子の目を意識した一種の道化的な振舞なのかもしれない。それを定子が見守るのである。次の^⑤からすると、定子は庭に下りる女房たちの様子を羨ましく見ていたのかもしれない。こうした光景は、女主人と女房たちの親和的な関係を示唆している。初めての場所だから、女主人には許されない、庭に下りての散策ということになる。女房だから許容されるのであり、そうした振舞があることで、定子サロンの華やきを語ろうとしたことになろう。庭好きの清少納言だからできた記述かもしれない。

^⑤は野分で荒れた前栽を繕うために庭に下りている女房たちを眺める十七、八歳の女性の様子であった。『源氏物語』「野分」巻にも、野分の後に前栽を繕う場面が語られている。

④ 南の殿にも、前栽つくろはせたまひけるをりにしも、かく吹き出でて、もとあらの小萩はしたなく待ちえたる風のけしきなり。折れ返り、露もとまるまじく吹き散らすを、すこし端近くて見たまふ。〔源氏物語』野分巻〕

紫上が、庭に下りた女房たちが荒れた前栽を繕っているのを端近で眺めているところである。女主人はみずから庭に下りることはしない。しかし、庭に下りて前栽を繕うのは、楽しいことであろう。^⑤の十七、八歳の女性は、「身分のある女性なので、軽々しく庭に下りることもならず、童女や身分の軽い女房たちが庭に出ているのを羨ましそうに見ている」ということになる。清少納言は庭に下りる自由さを享受しているのであろう。ここにも『枕草子』の女房文学としての側面が認められことになる。

四 前栽の露の美

『枕草子』には前栽に置かれた露を賞美することが何度も記されている。前栽の露の美が特筆されているのである。それは、定子自身の好尚であつたかもしれない。さらにこの点について見て行きたい。

⑧ 殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来、さわがしうなりて、宮參らせたまはず、小二条殿といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里に居たり。(略)

右中将おはして物語したまふ。「今日、宮に参りたりつれば、いみじう物こそあはれなりつれ。女房の装束、裳、唐衣折にあひ、たゆまで候ふかな。御簾のそばのあきたりつるより見入れつれば、八、九人ばかり朽葉の唐衣、薄色の裳に、紫苑、萩などをかしうて居並みたりつるかな。御前の草のいとしげきを、『などか。かきはらはせてこそ』と言ひつれば、『ことさら露置かせて御覽ずとて』と、宰相の君の声にていらへつるが、をかしうもおぼえつるかな。

『御里居、いと心憂し。かかる所に住ませたまはむほどは、いみじき事ありとも、かならず候ふべきものに思し召されたるに、かひなく』とあまた言ひつる。語りきかせたてまつれとなめりかし。参りて見たまへ。あはれげなりつる所のさまかな。台の前に植ゑられたりける牡丹などの、をかしき事』などのたまふ。(二三七段)

長徳二年四月から五月にかけて起こつた、伊周・隆家の従者による花山院に対する不敬事件後の一連の事態を受けての段である。右にある右中将は、源経房になり、任官したのが同年七月二十一日なので、これ以降の間もなくの頃の記事とされている。すでに出家していた定子は、高階明順宅と思われる小二条殿に滞在していて、何らかの事情で扈從しなかつた清少納言は実家に戻っていた。そこに経房が訪ねてきて、小二条殿の定子の様子を聞かせている。引用部後半からすると、経房は清少納言の帰参を促すべく、しみじみとした小二条殿のことを語るのであらう。

経房は、庭草が茂っていたので、女房に「どうしてこうなのですか。刈り取らせたらよいのに」と言ったところ、「わざわざ露を置かせた前栽を定子様が御覧になるので」と答えられたと言う。「ことさら露置かせて御覧」になるのが、定子の好みだったというのである。前栽が茂っていれば、それだけ露も多くなるので、その光景を見ようとしたのである。純粹に前栽の露の美を好んだのか、無常の例えになる露にわが身のはかない境遇を見出していたのか、いずれとも取れよう。定子の好尚とすれば、これ以前からあった美意識となろう。そして、この好尚は、清少納言のものでもあった。

⑨ 九月ばかり夜一夜降り明かしつる雨の、今朝はやみて、朝日いとけざやかにさし出でたるに、前栽の露はこぼるばかり濡れかかりたるも、いとをかし。

透垣の羅文、軒の上などはかいたる蜘蛛の巣のこぼれ残りたるに、雨のかかりたるが、白き玉を貫きたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。

すこし日たけぬれば、萩などの、いと重げなるに、露の落つるに、枝うち動きて、人も手触れぬに、ふと上ぎまへあがりたるも、いみじうをかし。と言ひたる事どもの、人の心には、つゆをかしからじと思ふこそ、またをかしけれ。

(二五段)

右は「露は」の類聚的章段としてもおかしくない記述になっていて、段落分けのように三様の露の美が記されている。いずれも、庭の様相である。

一つ目は「前栽の露はこぼるばかり濡れかかりたる」光景である。降り明かした夜雨がやんで、朝日があざやかに照り出して、しとどに置かれた露が前栽にかかっている様子は、実に趣きがあるというのである。当然、多くの露は、朝日に輝いていたことになろう。

二つ目は「蜘蛛の巣のこぼれ残りたるに、雨のかかりたるが、白き玉を貫きたるやうなる」光景で、この「白き玉」は露である。蜘蛛の糸に露がかかっているのは、白玉を貫いているようだということで、これはすでに指摘があるように和

歌的な発想であった。すなわち、「秋の野に置く白露は玉なれや貫きかくる蜘蛛の糸すぢ」（古今・秋上・二二五・文屋朝康）によっていよう。

三つ目は、「萩などの、いと重げなるに、露の落つるに、枝うち動」く光景である。露が落ちるとその分軽くなり、人手がないのに枝が上に跳ね上がる。その瞬間的な光景がまことにおかしいというのである。そして、他の女房は、そんな光景に対して、「露をかしからじと思」っていると洒落ている。少しものの意の「つゆ」と掛詞にしていよう。自分だけが、露のかもす風情を見出して楽しんでいとするわけだが、それは定子の好尚と同じなのであった。心ひそかに定子との同調を期しているのかもしれない。

この二つの段以外でも、露の美は見出されている。

⑩ 木の花は、（略）四月のつごもり、五月のついたちのころほひ、橘の葉の濃く青きに、花のいと白う咲きたるが、雨うち降りたる早朝などは、世になう心あるさまにをかし。花の中より、黄金の玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露に濡れたるあさぼらけの桜に劣らず。郭公のよすがとさへ思へばにや、なほさらに言ふべうもあらず。（三五段）

雨に濡れた橘の花や葉と、その実の取り合わせの美しさを例えるのに、「朝露に濡れたるあさぼらけの桜」が引き合いに出されている。「朝露に濡れたるあさぼらけの桜」は、植物と露の取り合わせのなかで、最高の美しさとなろう。それと橘は比肩されているのである。

⑪ 草の花は、（略）萩、いと色深う、枝たをやかに咲きたるが、朝露に濡れて、なよなよとひろがり伏したる。さを鹿のわきて立ち馴らすらむも、心ことなり。（六五段）

昼には日にあたり消えてしまう露の美は、⑨⑩にもあったように朝の風情である。ここでは、色の濃い萩の花が枝もたわわに咲いて朝露に濡れた様子が捉えられている。⑧にあったように、定子が「草のいとしげき」ところに露が置いたの

を好んだように、萩も枝のたたわな状態がいいのである。

⑫ あはれなるもの、(略) 秋深き庭の浅茅に、露の色々玉のやうにて置きたる。(一一五段)
これも、定子の好尚と同じとなろう。露がさまざまに玉のように置かれているのが、秋深き庭の風情として、しみじみと感じられているのである。

以上が前栽に置かれた露の記述になる。定子の好尚に合わせるかのように、茂った前栽に露がしとどに置かれている美が見出されているのである。

五 池の水草と蓮

寢殿造の南庭に池(南池)が掘られると、その汀などには様々な植物が植えられ、池中には蓮などを生やしていた。清少納言は、こうした植物と一体になった池も好んでいた。

⑬ 池ある所の五月、長雨の頃こそいとあはれなれ。菖蒲、菰など生ひこりて、水もみどりなるに、庭も一つ色に見えわたりて、曇りたる空をつくづくとながめ暮らしたるは、いみじうこそあはれなれ。いつも、すべて池ある所はあはれにをかし。冬も、氷したるあしたなどは言ふべきにもあらず。わざとつくるひたるよりも、うち捨てて水草がちに荒れ、青みたる絶え間より、月影ばかりは白々と映りて見えたるなどよ。

すべて、月影は、いかなる所にもあはれなり。(一本・二六段)

五月の様子として記されているが、「いつも、すべて池ある所はあはれにをかし」とされるように、池のある庭は、どの時節、どの場所でも「あはれ」で、「をかし」だとされている。池には、菖蒲や菰などの植物があるからであり、それらの葉の色のように、「みどり」の水面を見せるからである。また、冬であっても結氷した朝の風情は、言うまでもなく

すばらしいとしている。

また、手入れをされているよりも、青々と水草が繁茂して荒れた池で、隙間の水面に月影が白々と映っている美も捉えられている。ここは水草よりも月影に重心があるが、この取り合わせは清少納言独特の美感であろう。

ここで「水草がちに荒れ」とあるように、池に水草があるのは、荒廢の象徴であった。

⑭ 昔おぼえて不用なるもの、(略) おもしろき家の木立焼け失せたる。池などはさながらあれど、浮草、水草などしげりて。(二五七段)

焼尽した邸宅の様子で、池はそのまま残っていても、浮草や水草が繁茂しているのは、かえって往時が偲ばれるということであろう。池のある邸宅は情趣があるが、水草の繁茂は荒廢を感じさせるのである。次の段も同じである。

⑮ 女一人住む所は、いたくあばれて、築地なども、またからず、池などある所も、水草あ、庭なども、蓬にしげりなどこそせねども、所々、砂の中より青き草うち見え、さびしげなるこそあはれなれ。物かしこげに、なだらかに修理して、門いたくかため、きはぎはしきは、いとうたてこそおぼゆれ。(二七一一段)

親が亡くなったか、男が通わなくなったかして女が一人で住む家は、手入れもおろそかになり荒廢の相を見せるようになる。池には水草がはびこってしまい、庭も蓬が茂るまでにならなくても、砂子に青草が顔をのぞかせるようになる。そうした様相は、しみじみあはれだと言うのである。池の水草も庭の蓬も、荒廢の相を呈するのである。

池の水草が年月の経過や荒廢を意味させるのは、『万葉集』以来の把握であった。

⑯ いにしへの古き堤は年ふかみ池の渚に水草生ひにけり (万葉集・三・三七八・山部赤人)

⑰ わが宿の板井の清水里とほみ人し汲まねば水草生ひにけり (古今六帖・二・一三四〇)

前者は年月のたった堤の池には水草が生えているとし、後者は人も汲みに通わなくなった清水には水草が生えてしまっただけとしている。こうした通念があるものの、池と水草にそぞく清少納言のまなざしは注目すべきであろう。

この一方で、池の美を際立たせる蓮の花の美も捉えられている。

⑮ 草は、(略)蓮葉、よろづの草よりもすぐれてめでたし。妙法蓮華のたとひにも、花は仏にたてまつり、実は数珠に貫き、念仏して往生極楽の縁とすればよ。また花なき頃、緑なる池の水に紅に咲きたるも、いとをかし。翠翁紅とも詩に作りたるにこそ。(六四段)

蓮は仏に近い草であり、どの草よりも一段とすぐれている。また、緑色に染まって見える水面に紅蓮の花が咲く美も捉えられている。緑(青)と赤の対比・対照であり、「翠翁紅」という表記にこだわっているように、これは清少納言好みであった。ついでに、この点に触れておきたい。

⑯ 花の木ならぬは、楓。桂。五葉。たそばの木、しななき心地すれど、花の木ども散り果てて、おしなべて緑になりたる中に、時もわかず、濃き紅葉のつやめきて、思ひもかけぬ青葉の中よりさし出でたる、めづらし。(三八段)

⑰ 正月十余日のほど、空いと黒う曇り厚く見えながら、さすがに日は、けざやかにさし出でたるに、えせ者の家のあら畑といふものの、土もうるはしうもなほからぬ、桃の木若立ちて、いとしもとがちにさし出でたる、片つ方はいと青く、いま片つ方は濃くつややかにて、蘇芳の色なるが、日影に見えたるを、(一三八段)

⑱ 五月四日の夕つ方、青き草多く、いとうるはしく切りて、左右になひて、赤衣着たる男の行くこそ、をかしけれ。

(二〇九段)

⑲は青葉の中に、時節はずれの紅葉を見出した光景、⑳はまだ花の咲かない桃の木の徒長枝が、片方が青いの、もう片方が蘇芳色に見える光景、㉑は庭ではないが、赤衣着た男が、肩の左右に青草を担いでいる光景となる。植栽関係以外にも赤と青の対照は『枕草子』に認めることができる。この赤と青との対照は、左右に分けられる雅楽や物合・歌合などでの衣装の色の違いで当時としては一般的であった。また、赤と青は裳唐衣衣装において禁色であった。それを植物

一五

植物に対する評価に関わっていたことが挙げられよう。

②② 風は、(略) 九月つごもり、十月のころ、空うち曇りて、風のいとさわがしく吹きて、黄なる葉どもの、ほろほろとこぼれ落つる、いとあはれなり。(一八八段)

②③ あてなるもの、(略) 梅花に雪のふりかかりたる。(四〇段)

②④ 草は、(略) 雪間の若草。(六四段)

②⑤ 五日の菖蒲の、秋冬過ぐるまであるが、いみじう白み枯れてあやしきを、引き折りあげたるに、その折の香の残りてかへたる、いみじうをかし。(二二四段)

②⑥ 木の花は、(略) 木のさまにくげなれど、棟の花、いとをかし。かれがれにさまことに咲きて、かならず五月五日にあふもをかし。(三五段)

②⑦ 草の花は、(略) かにひの花、色は濃からねど、藤の花といとよく似て、春秋と咲くがをかしきなり。(六五段) こうした点は、他の章段とかかわって興味深いが、残された点は今後の課題として、今回はひとまずここで筆を措くことにしたい。

注

- (1) 拙稿『平安貴族女性と庭——『伊勢集』の前栽——』(『大妻女子大学紀要——文系——』48、二〇一六・三)
- (2) 拙稿『『蜻蛉日記』道綱母の前栽——平安貴族女性と庭——』(『大妻国文』47、二〇一六・三)
- (3) 注(2)に同じ。
- (4) 萩谷朴『枕草子解環』(二、同朋出版、一九八二・三)
- (5) 小森潔『『枕草子』の宮廷生活』(倉田実編『王朝文学と建築・庭園——平安文学と隣接諸学1、竹林舎、二〇〇七・五)
- (6) 三卷本勘物「小野右府記、七月五日中宮女房昨日陰陽察の楼に登り、また侍従所に向かひ巡り見る。四位少将明理直衣、烏帽

子にて陪従す。左衛門の陣の官等、これを見て奇しむ」

(7) 萩谷朴『枕草子解環』(四、同朋出版、一九八三・四)

(8) 仲隆裕「庭園史からみた王朝文学―寝殿造庭園における植栽―」(倉田実編『王朝文学と建築・庭園』平安文学と隣接諸学1、竹林舎、二〇〇七・五)

〔引用文献〕

『小右記』『御堂関白記』は大日本古記録、『中右記』は増補史料大成、『百鍊抄』は新訂増補国史大系、和歌は新編国家大観、和歌以外の文学作品は新編日本古典文学全集によった。